

H26.5.31.月8

ご当地マンホールに夢中

地域の名所や特産物、動植物などが美しく描かれたデザインマンホールにひかれ、大阪府豊中市の池上修さん(67)と和子さん(66)夫婦が撮影を始めてから、12年になる。これまでに約3000点を撮ってきた2人は、「道の上に豊かな世界が広がっていることを知ってもらえれば」と話す。

和子さんが自宅近くで、ワニが描かれた蓋に気づいたのがきっかけ。豊中市で発見された化石にちなんだものだった。近隣を調べると、「滝」(箕面市)や「太陽の塔」(吹田市)など、土地ごとに意匠があることを知り、撮影を始めた。

修さんも興味を抱き、互いの定年退職後、2人で各地を旅行しながら探すように。フリーと車で北海道や東北を10日間かけて回ったこともある。これまでに全国を走った距離は約8万キロで、地球2周分になる。

豊中の夫婦 12年で3000点撮影

「デザインマンホールの魅力を知ってほしい」と話す池上さん夫婦(大阪府豊中市で)



「欠かせないのが古いカーナビです」と修さん。「平成の大合併」(1999、2010年)以前の旧市町村ごとに作られた蓋も多いことから、古い情報が登録された機種を10年以上使っている。例えば、旧役場の近くを探せば、見つけやすいという。蓋の泥やほこりを払うハケも必需品だ。

修さんのお気に入りには、高松市の「屋島の戦い」。源平合戦の一場面を美しく描き、「歴史の一場面が迫ってくる」という。和子さんは大阪市の「大阪城」を

推す。「城と桜のソフトな色合いが美しい」と話す。ただ、最近は個性的なデザインが少なくなったという。目立たないように路面の色に合わせた蓋も増えており、「もっとその土地ならではの表現をしてほしい」と願う。

今年2月、成果をまとめた「デザインマンホール100選」(アットワークス)を出版し、好評だ。「ご当地の魅力や歴史に触れるきっかけになる」と、足元に注目するよう勧めている。

デザインマンホール 主に下水道マンホールの蓋が対象。1977年、魚を同心円状に描いた那覇市のものが最初とされる。80年代半ば、建設省(現国土交通省)が「下水道のイメージアップに」と呼び掛け、各地に広まった。蓋の大半は直径60センチ、重さ約40キロの铸铁製。樹脂塗料で彩ったカラフルなものが多い。



大阪城(大阪市)



毛織物(泉大津市)



屋島の戦い(高松市)



恐竜化石(勝山市)



広島カープ(広島市)